川口市内観光ルートマップ 1

A-2 キューポラオブジェ

A-1 川口駅銘板

最新鋭ときどきレトロ 川口の魅力盛りだくさん

川口駅東口コース

川口市マスコット「きゅぽらん」

A-2 働く歓び像

B-3 文化財センター

A-2 JR川口駅前

鋳物御殿のビフォーアフター

旧鋳物問屋鍋平別邸は、明治時代末に鋳物商・四代目嶋崎平五郎が、自分の隠居用に建てた屋敷です。初めに平屋の主屋を建設してから、主屋の2階や離れ、蔵、庭などを建て増し、昭和にかけて5回の増築が行われました。平成13年(2001年)には「再現することが容易でない建造物」として、主屋・離れ・蔵が国の登録有形文化財となりました。庭園は市の名勝に指定されています。

中に入ると、近代モダンのぜいたくなしつらえに目を奪われます。松を図案化したベネチアガラスが洗面所を飾り、離れの床の間に使用された黒檀は、今では手に入らない高級品とのこと。廊下に施された幾何学的な模様の天井も、手の込んだ細工がされています。

現在は母子父子福祉センターとして使われていますが、一般も見学が可能です (団体の場合は事前連絡必要)。開館時間 9:00～16:00、月曜・祝日・年末年始休、無料

鋳物の街に残る和モダン

川口市経済部産業振興課

〒332－8601　川口市青木2-1-1
電話:048(259)9018
FAX:048(259)2622

2019.3

川口発祥の地へようこそ！　ハイテク都市にひそむ歴史

人口60万人を超え、勢いづく川口市の中心部が川口駅周辺です。駅前に広がる巨大なペデストリアンデッキから出発し、川口神社へ。現在、南中学校が建っている荒川のスーパー堤防のあたりは、600年前の文献に「こかはぐち」(小さい河口という意味)として登場しています。徳川将軍が日光に参るときに通る御成街道には、川口宿のにぎわいを思い起こさせるような古い商家が残ります。大奥最後の御年寄瀧山の墓なども現存しています。再開発のビル群から目と鼻の先にあるリアル史跡。息づく歴史に心躍ります。

A-1 JR川口駅

明治43年(1910年)に川口町駅として開業。昭和61年(1986年)までは貨物駅もありました。1日の平均乗客数は約8万人と、大宮駅、浦和駅に次いで3番目。重厚な駅名看板は鋳物製で、上野ー熊谷間を走行した初の機関車「善光号」があしらわれています。

B-2 キュポ・ラ

旧国鉄貨物線跡地などを再開発した川口駅東口の新たなランドマークのひとつ。約2.3ヘクタールの敷地に店舗や住宅、公共施設が入っています。市立中央図書館は最新鋭設備が自慢。蔵書約50万冊、座席数約 500 席と大規模で、多くの方に利用されています。

B-2 川口神社

川口市の総鎮守。平安時代の天慶年間(938～947年)に大宮氷川神社より勧請し、古来より信仰をあつめたといわれています。享保18年(1733年)の銘が残る神鏡は市指定文化財となっています。12月15日は大歳祭(おかめ市)でにぎわいます。

C-2 善光寺（ぜんこうじ）

長野の善光寺と同様に阿弥陀三尊像が安置されていたことから、江戸庶民の信仰をあつめました。安藤広重の「江戸百景めぐり」に登場する「川口のわたし善光寺」は向こう岸から描かれた絵として有名です。(写真は「川口のわたし善光寺」(安藤広重　画))

C-3 川口の渡し・鎌倉橋（かまくらばし）の碑

現川口市舟戸町と現北区岩淵を結んだ渡し。源義経が奥州平泉から鎌倉へ馳せ参じた時にはここを通ったと考えられています。かつての存在を記念して「鎌倉橋の碑」が本町1丁目の荒川堤防際に建てられています。

B-3 文化財センター

市内の文化財を展示しています。発掘調査の出土品や鋳物に関する資料、獅子舞などの民俗芸能に使う道具などが見学できるほか、体験学習も行われています。9:30～16:30(入館16:00まで)、月曜(祝日の場合は翌日)、年末年始休。一般100円、小中学生50円

B-3 錫杖寺（しゃくじょうじ）

錫杖寺は真言宗智山派の寺院です。江戸幕府2代将軍・秀忠が日光参拝の途中、錫杖寺を休憩所と定めて以来これが吉例となり徳川家と深い関わりを持つことになります。本堂・屋根瓦・灯籠などに「葵の御紋」を見ることができます。江戸城大奥最後の御年寄・瀧山が眠る墓が、本堂裏手の墓地にあります。

A-2 樹（じゅ）モール

川口駅東口の活気あふれる目抜き通り。地場産業である植木と鋳物を街づくりに取り入れ、ところどころにベンチやユニークな彫像が置かれています。電線を地中化しており、空間が広く感じられる点も特徴です。平成5年(1993年)には国土交通省の手づくり郷土賞を受賞。大手チェーン店が並ぶ一方、個人経営の商店も軒を連ね、幅広い客層に愛されています。

海を渡った川口の大砲～幕末の鋳物技術

コース途中の本一通りから東に進むと、大きな大砲が展示されているのが見えます。これは幕末の嘉永5年(1852年)、津軽藩の依頼を受けた川口の鋳物師・増田安次郎が、幕府の砲術指南役を務めた高島秋帆と協力して作り上げたもののレプリカです。全長3.5メートル、口径15センチ、重さ3トン、射程距離はなんと2,500メートル。当時の日本では不可能といわれた大砲の製作を可能にしたのは、川口鋳物の高い技術力があったからです。

19世紀に入ると、日本の近海には外国船が来航し、開国を強く迫ってきました。攻め込まれるのではないか、と脅威に感じた幕府は文政8年(1825年)に「異国船打払令」を出し、弘化元年(1844年)には江戸の台場など各所に砲台を据え、外国船を警戒するようになりました。

そんな時代状況のなか、川口の鋳物師は西洋式の大砲について研究を重ね、独自に大砲を鋳造。安政6年(1859年)にはその一人である増田安次郎に対し、高島秋帆から大砲づくりの功績をたたえた褒状が出されています。この「高島秋帆褒状」と、幕府と工場との連絡や銃砲や砲弾の製造数を記録した「増田家鋳造関係古文書」は、市指定文化財となっています。安次郎が幕末期の5年間に製造した213門の大砲と4万1,323発の砲弾は、全国各地に配備されました。それまで鍋、釜などの日用品が主だった川口鋳物が、武器の鋳造も行うようになったのは、まさに時代の流れといえます。

C-3 幕末に作られた大砲のレプリカ(増幸産業)

これらの大砲は日本には現存していませんが、最近になって、当時のものがフランスのパリにあることが判明しました。この大砲は文久3年(1863年)に長州藩が下関海峡でアメリカ、フランス、オランダの船を砲撃した下関戦争の際、敗れた長州藩から戦利品として持ち去られたもの。うち1門がアンバリッド軍事博物館に残っていました。前庭に展示されている大砲のひとつに「十八封度砲　嘉永七年春於江都葛飾別処墅鋳之」という銘が、長州藩の家紋とともに印されています。

川口産の鋳物製大砲は、遠い異国の地で、歴史を伝え続けています。

最新鋭ときどきレトロ　川口の魅力盛りだくさん

No.1 川口駅東口コース

進むごとに日本の産業史を体感。川口をもっと知りたくなるコースです

JR川口駅東口（スタート）		
	10分	0.8km
川口神社		
	11分	0.9km
鎌倉橋の碑		
	6分	0.5km
文化財センター		
	5分	0.4km
錫杖寺		
	20分	1.6km
JR川口駅東口（ゴール）		

所要 52分　全長4.2km

歩く時間は個人差がありますので、あくまで目安です